南方（ビルマ）

ビルマ

―イラワジ川敵前決死の伝令―

静岡県　鈴木清一

昭和二十年四月二十九日（天長節）、我等ビルマ派遣森第三七五一部隊稲垣隊はビルマ方面軍の命令により印緬国境アキャブの前線より泰緬国境に集結すべく、悲壮なる転進作戦を続行中であった。

　イラワジ川流域のアランミョウ作戦を終えた我が部隊は、イラワジ川にそって転進し、パロウ部落に到着した。敵は優秀なる装備による銃火器と衆をたのむ大兵力により、我が軍の背後より猛烈なる追撃の手をゆるめない。

　日本軍としては、作戦上どうしてもパロウで一戦交えて支えなくてはならない状況下にあったのである。敗戦直前すでに落日の感ありし我が日本軍と、優秀なる火器弾薬と膨大なる兵力と制空権・制海権を掌握した連合軍とは、比較するとちょうど大人と子供の戦争のごとくである。

　まずパロウ部隊の後方四～五キロの地点に砲列を敷いた敵砲兵部隊の砲撃が始まると、これはちょうど日本の田舎の秋祭りの大太鼓を打つようである。

　ドンドンドンドコ、ドンドンドンドコ。それこそ山が変形して樹木が吹っ飛び、裸山になるまで全く筆舌に尽されざる凄絶さである。それに引換え我が軍はただあるものは軽機と小銃のみにて、弾薬も各自が身に

つけ持ったもののみにて、後の補給はなく、一発撃てば万倍になって返ってくる始末。ただ防空壕によって我が身を隠しているのが精一杯である。

砲弾の炸裂する音、重機、軽機関銃弾、また空では敵艦載機ハリケンの機銃掃射。これでは全く生きた心地など到底あり得ない。ちょうど昼飯過ぎであった。我が部隊だけでは到底支えきれるものではないと知って、イラワジ川対岸を転進して来る歩兵第十四部隊の応援を依頼すべく伝令を出せとの中隊長命令である。イラワジ川を渡ることゆえ、先ず「泳ぎの出来る者」との条件にて三小隊の深萱兵長、山口上等兵、一小隊より鈴木上等兵と三名指名である。

私は命令を受けた時ハット思った。最早、命はこれまで、到底生還は期し難い。かくなる上は潔く散る以外にないと覚悟を決めざるを得なかった。それもそのはずである迫撃砲、機関銃、飛行機の機銃掃射とこの弾幕を逃れることは奇跡以外にはありえない。当然、戦死は覚悟せねばならぬ。しかしながら帝国軍人たるもの敵前の命令違反はできぬ。また白昼、中隊全員注視の中で名誉の戦死を遂げればこれまた男子の本懐と半ばふてくされ気味も手伝って覚悟ができ、度胸が定まっていた。そして三名で中隊長の前に集合して命令を受けた。

「万一最後の一人になっても任務を果たせ」

と励まされ、泳ぐより船で行けと。そこでテンボーで行くことにした。

イラワジ川湖畔は湿地帯で川まで三百メートル、また川幅三百メートルは充分にある。地上にては迫撃砲、機銃、空にはハリケン戦闘機の機銃掃射、川畔まで無事にでることとさえ難しい。しかし命令は厳として服従せねばならぬ。そこで三人で「現地人の風を装って行こうではないか」と相談し、まず身体に川泥をこってりなすり付け、腰にはロンジーを、頭にはターバンを巻いて、いかにも現地人らしく装った。

そして素早く走りながら湿地帯を越えて川畔に急いだ。そしてテンボーに乗り込み、全く文字通り砲煙弾雨の中を度胸を定めてヨイショヨイショと漕ぎ出した。中隊の者たちは手に汗を握って何とぞ無事にと祈

って見つめている。漸く七十メートルか八十メートル沖に出た途端、敵機ハリケンが川の上すれすれの低空で飛んできた。「もう駄目だ、覚悟しろ」と互いに励ましながら、それでも最後まで一生懸命渾身の力を振り絞って漕いだ漕いだ。

運良く神は、我を助け給ふたか、敵機ハリケンは現地人と思うてか翼を交互にはばたかせたが、そのまま行き過ぎ去った。「それ、今だ」とばかり死力を尽して漕いで目的の対岸に無事到着することが出来た。この時の喜びは到底筆舌に尽くすことは出来ない。無事伝令の任務を果たし、夕方までジャングルで休養し、薄暮になって再びイラワジ川を渡って中隊に帰ってきた。

このときの中隊長の喜びは一通りではなかった。

「でかしたご苦労、お前等の功績は必ず覚えて置くぞ」と前線にてなけなしの貴重品ジャワ製の煙草「興亜」とサイクルを一人に三個づつ与えて涙を流し手を取ってよろこんで呉れた。

あゝこの稲垣中隊長も二十年八月十四日、日本の敗戦も知らず護国の鬼と化し、我々が決死の伝令により応援を求めた歩兵第十四部隊の勇士等も、その夜の戦闘で玉砕し、ビルマ戦の華と散った。

終戦後、早くも何時しか四十六年、現在の若者達は物質的にも何不自由なく平和で自由主義を謳歌し、あの苛烈を極めた大東亜戦争の傷痕を忘れんとしている。はなはだ遺憾千萬ではある。今次大戦中、陸戦においては特に凄絶を極めたビルマの転進作戦に従軍し、奇しくも生を得てこの手記を綴り得ること、誠に転た感慨無量である。

白骨街道

滋賀県　田　中　善　輝

まえがき

東洋に植民地を持つ国々を追い出さない限り東洋永遠の平和は無いと教えられて育った。陸海空の精鋭は国民の期待を裏切らず陸に海に大いなる戦果を挙げて